

現代社会における ソーシャル・キャピタルの役割



清水 英範

Hidenori Shimizu

大阪ガス エネルギー・文化研究所
主任研究員



宮川 公男

Tadao Miyakawa

麗澤大学国際経済学部教授、
(財)統計研究会理事長、
一橋大学名誉教授

現代社会では、社会的な触れ合いなど、従来のコミュニティの創造が難しくなってきた。いわゆる「匿名性」が高い社会の進展により、都市と生活者に、これまであまり見られなかったような、様々な弊害が生まれている。こうしたことから、近年、「ソーシャル・キャピタル」という概念が注目されている。

日本ではこれまで、地域のつながりの中で自然に芽生えてきた、いわゆる「社会関係資本」が都市では消失しており、この再構築が、都市における様々な問題解決に役立つといわれている。また、それだけに止まらず、このソーシャル・キャピタルの存在が、地域の課題解決をはじめ、まちづくりのパフォーマンスを大きく左右する。あるいはソーシャル・キャピタルを形成する仕掛けや仕組みづくりが、都市や地域の活性化のためには欠かせない条件であることが、各地の事例を通して認識されてきている。

そこで今回は、経済学の視点から、都市と生活者を取り巻く成熟社会の課題に関して、ソーシャル・キャピタルが果たす役割について、経済学の専門家である宮川公男教授にお話をうかがった。

パットナムの論文をきっかけに
ソーシャル・キャピタルに着目

清水 先生の著書の中に、ずばり『ソーシャル・キャピタル』という題名の本がありますが、先生がソーシャル・キャピタルに注目されるようになってきたきっかけは、どのようなものだったのでしょうか？

宮川 ソーシャル・キャピタルというのは、そのまま訳せば「社会資本」ですが、私はかねてから社会資本という言葉の使い方はおかしいのではないかと、別の関心から問題意識を持っていました。それはなぜかと言いますと、今、話題になっている行政改革で、国のバランスシートをつくる際に、道路、港などハードなインフラを「社会資本」と呼んでいるわけですが、それらは「資本」ではなく、「資産」であるということからでした。シートの左側に載るのですから、「社会資産」と呼ぶべきではないか。「社会資本」というのは、国民、市民が共同体である社会を成り立たせるために拠出するお金のこと。会社の資本と同じで、それを使って道路とか、港とか、そのお金をどういふふうに振り向けるかというのが、まさにバランスシートの左側の資産であるのに、それを「社会資本」というのはおかしいと言っていたのです。その後、英語の「ソーシャル・キャピタル」という言葉が、そうではない別の意味に使われていることを知りました。

清水 ロバート・パットナムの論文、ボーリング・アロウン・アメリカにおけるソーシャル・キャピタルの衰退（一九九五年）に触れたのがきっかけですね。二〇〇〇年にはその論文を増補した本が出版されており、そのことも契機となってここ数年のうちにソーシャル・キャピタルについて国内外で広く論じられ始めたのですね。

宮川 そうです。それでソーシャル・キャピタルという言葉がどういふふうに使われているかを知ったわけです。社会資本という言葉の使い方がおかしいという意識でソーシャル・キャピタルを考えたのですが、こ

ういう論文があるということ、初めてソーシャル・キャピタルに関心を持ち、その関連のものを読み始めますと、これは大きな問題だということに気が付き、勉強をはじめたわけです。

清水 確かに英語を日本語に訳しますと、かなり異なった意味に取られるようになるケースは多いですね。そういった意味で、ソーシャル・キャピタルという言葉自体がまだ定まった概念ではありませんが、特に日本では、非常に様々な使い方、捉え方がされるのかもしれないですね。

時代の変化に伴い、経済学のあり方も問い直される

清水 社会的に大きな変化が進む中で、経済学が今まであえて触れずに着目されてこられた問題が顕在化してきたと思います。伝統的な経済学は、合理的な選択や利己的な規準と、ミクロ的な個人を扱っていました。コミュニティとか個人が属する集団、相互依存性を理論モデルの中で捨象してきたわけです。それはとりもなおさず、価値中立的で、規範的な側面から自由であるという学問的特徴に由来しているのですが、そういう整然とした理論体系や分析ツールとしての利便性により、一方で「経済学は社会科学の女王」であるともはやされてもきたのですね。

宮川 時代がグローバル化するにしたがって、経済学のあり方も変わって当然です。オーストラリアの科学技術大臣だったバリー・ジョーンズが、「市場部門、資本主義的な企業部門と、政府とか公共部門だけでは、これからあらゆる人に生活の糧となる職を与えることはできない」と言っています。その背後には、一つの要因として情報化があります。早い話が、映画を撮るのに、かつてはエキストラを大量に使いました。エキストラで出れば出演料がもらえるわけですが、今は時代劇などでもほとんど全部、画像処理で撮ってしまいます。時代劇の戦闘場面もエキストラを動かしているのではなく、データベースからの画像を組み合わせて

てやっています。情報処理技術の発達によって今まで存在していた、お金がもらえる仕事がどんどんなくなっていくままです。

清水 技術主義やIT化、資本効率性の追求などによる生産構造の変化や生産拠点のシフトが就業者中、最も層の厚い中流階層を直撃して、一面では失業問題や地域コミュニティの破壊を引き起こすという現象です。そういう階層、地域に、本来行き渡っていたソーシャル・キャピタルの毀損という状況が見られると思います。短期的に考えれば、経済成長、生産性の向上と、ソーシャル・キャピタルはトレードオフの関係ではないかという疑問が出てくると思います。しかしことはそう簡単に、単純な二元論で割り切れる問題ではないと思います。

宮川 技術との関係もあるのですが、歴史的に考えれば、一九世紀はじめのイギリスにラッダイト運動、機械ぶち壊し運動がありました。それまで馬の力を使っていた、あるいは人間の肉体的な力で行っていたものを機械に置き換える。フィジカルな力、人間労働力を機械に置き換えるのに反対したのがラッダイト運動です。その後、一九五〇年代から六〇年代、戦後の自動制御技術を背景に出してきたのがオートメーションです。オートメーションでフィードバックコントロールができるということで、モノづくりの工場現場での作業



をオートメーションに置き換えます。多少フィードバックが働くから知能制御は一部入りますが、基本的にはモノをつくる作業になります。ところが、その後の現代の情報技術は、知能労働を置き換えるものです。これまでも、人間の持っている力のいろんな面を、次々に機械に置き換えてきました。今後どうなるか分かりませんが、このまゝいきますと、果たして人間でなければならぬ、どういう能力が残されるのか心配です。一つには労働というものをどう考えるかということです。労働と報酬との結びつきを考える。ポランティアでも露を食って生きていくわけにはいかないので報酬は必要なのですけれど、報酬を求める人間の貪欲をどこまで抑え、お金以外の価値を労働と結びつけて見いだすのかということですね。

清水 IT化や経済のグローバル化が進むことで、これまでの労働のスタイルのままではいられませんが、労働に対する価値観も変質を迫られるということですね。

宮川 しかし一方では食わなければ生きていけないわけです。しかし基本的には、お金というものには甚だしい偏在があります。今のグローバルな金融市場を見ても、お金以外に買うものがないお金が荒れ狂っている。これをカジノ資本主義と言うわけですが、資本主義がカジノ化して、厄介なのは、俺は、カジノは嫌いだからカジノには出入りしないよ」というわけにはいかないことです。普通のカジノだったら、私はカジノに行きませんよ」と言っていればいいけれど、他の人がやっているカジノが自分に影響してくるわけです。外貨に投資をしないで日本円で抱え込んでいても、日本円が下がれば損をします。他の人のカジノ行為によって、カジノに入らない人も影響を受けてしまう。だから厄介なのです。製造業でも一生懸命モノづくりを励んでいけばいいというわけにはいかない。コストダウンして努力したけれども、円相場の変動、ドル相場の変動で、一瞬にして努力の成果が帳消しになるとい

う、カジノ資本主義の影響を、好むと好まざるとにかかわらず受けてしまします。資本主義のグローバル化はどうしても止められない動きであることは確かですが、しかし厄介な問題です。

資本主義の変質が問題

清水 今までの成長神話の崩壊や、カジノ資本主義化を目の当たりにして、従来の価値観と異なるものを求める時、ソーシャル・キャピタルが果たす役割も重要になってくると思います。問題は、資本主義の変質ということだと思えますが、資本主義の変質を語る言葉として、従来の経済学が有効性を失いつつあるのかなという気がします。経済学でソーシャル・キャピタルを扱う場合、本来は緑豊かな枝葉を伸ばしているはずのソーシャル・キャピタルが、むりに剪定された寸足らずのソーシャル・キャピタルという扱いになっている印象を受けます。ソーシャル・キャピタルを一定の解釈のもとで、経済学のチームに置き換えるという手続きにも原因があると思います。例えば、社会学者のルーマンが、複雑な社会においては、複雑性を縮減する有効な形式として信頼が形成される」というロジックを展開していますが、その論理に従って、経済学が「信頼」を扱えば、信頼形成のメカニズムは、新制度学派の概念である「取引費用」を削減するという問題に還元され、矮小化されるわけですね。そうではなく、本来、経済学は人間や人間の心、社会にかかわる問題を広く提起した学問だったはずで、経済学の祖のアダム・スミスは、主著『道徳感情論』の中で、社会秩序を保障する規範について述べています。その規範は公平無私な観察者、オブザーバーの視点です。日本の言葉では「お天道様」の概念に置き換えられると思いますが、つまり公平無私なオブザーバーとの共感シンパシーによって人には自己規制が働くというわけです。こういう、個人とオブザーバーの共感が、両者

を介して人間と人間の共感につながっていくことになる。さらに自己規制の内容とは家族や友人、国の幸福についての配慮にほかなりません。従ってアダム・スミスが明らかにした人間性の社会的本質はソーシャル・キャピタルの概念と相通するものがあります。そういう意味では経済学の揺籃期に、すでにソーシャル・キャピタルに関する考え方が内包されていたと見るべきではないかと思えます。

宮川 もともとアダム・スミスは経済学の先生じゃなくて、モラル・フィロソフィの先生でした。『国富論』だけが取り上げられますが、『セオリー・オブ・モラルセンシメント』も『道徳感情論』と訳されています。あの時代は、今に比べると社会が単純ですから、自由放任でほっておいても現代的な言葉で言うと、『外部効果』がそんなに大きくない時代でした。そのため、自由に皆が動き回っても、人にあまり影響を与えないで済みましたが、今はそうじゃありません。今も農村であれば自分の敷地に高い建物を建てても隣への影響は少ないけれど、都市化社会になると、勝手に三階建てを建てれば隣に影響が出てきます。外部効果が極端に大きくなっていますから、自由にしていたのでは收拾がつかなくなる。車の数が少なければ交通規則なんてなくてもいい、衝突も起こらない。それぞれ自由勝手な行動をしていて、他の人に影響が及ばない範囲で全てできればいいですけど、できなくなってきましたから、そういう意味では自由の代償が大きな社会になってきています。

高齢化問題とソーシャル・キャピタル

清水 ソーシャル・キャピタルは見方によって、様々な様相を呈してきます。個人間の問題、個人と組織の次元で考えれば、就職とか、転職とか昇進、企業の組織運営とか私的なリターンでのかかわりで論じられる傾向が強くなります。その場合ソーシャル・キャピタルはビジネススク

ールが取り扱うような経営論、戦略論の問題になってくるわけです。もう一方、ソーシャル・キャピタルをより広く個人と集団、集団と集団の次元で捉えるという立場から、より公共的な側面から社会全体の問題、政策を論じていく必要があるのではないかと思いますが。

宮川 アメリカでのビジネススクールの先生がソーシャル・キャピタルを扱っている場合には、むしろソーシャル・キャピタルというのは、その人の持つている一種の資産である、俗な言葉で言うところ「コネ」ですよ。コネがたくさんある。コネづくりに金を使う。よく就職などでもコネがある人は早くいい職が見つかるか。ウィーク・タイという言葉があるけど、強いコネよりも弱いコネをたくさん持っている方が使えるとか。ソーシャル・キャピタルというのは、自分にとってみれば、一種の投資と同じように、コネづくりにお金を使えば自分のソーシャル・キャピタルが豊かになり、投資の元が取れるという感じのもの。例えば、ビジネススクールの先生は、そういう理解の仕方ですね。どちらかと言うとソーシャル・キャピタルは個人財であると。ではソーシャル・キャピタルは個人財か公共財か。ソーシャル・キャピタルは、個人にとってプラスになるものだ、だからそれにお金を使う。投資と同じようにキャピタルだという面もあります。個人財か、公共財かということについても両方の面があります。どういう立場で取り上げるかによって異なります。いろんな人がいろんな立場から取り上げているので、ソーシャル・キャピタルは何か、というのはなかなか難しい。

清水 ソーシャル・キャピタルは蓄積される過程では加速度的に好循環が繰り返されるといって研究もあります。不祥事などで信頼をなくした企業は加速度的に衰退していくという事態は、その逆の証明とも言えるのではないのでしょうか。従って企業にとって、信頼は傷つくことなく好循環し続け、蓄積されなくてはなりません。

宮川 そうなると、それはキャピタルというより、アセットですね。社会が

ら受ける信頼というなら、アセットというのが相応しい。企業にとっての資産やブランドもそうだと思います。

清水 近年、CSR(企業の社会的責任)ということが盛んに議論されますが、ある意味でCSRとはブランド戦略そのものとも考えられます。両者ともその本質は、「企業がステイクホルダーといかに強固な信頼関係を構築するか」ということです。「ブランドへの信頼の絆」が結ばれると、企業にとっては収益の拡大、ステイクホルダーにとっては顧客満足度の増大など、両者それぞれにとって様々なメリットが発生します。これまでのビジネススクールのソーシャル・キャピタル論では、企業と従業員との間のソーシャル・キャピタルは議論されてきましたが、顧客、地域社会といったその他のステイクホルダーと企業との間のソーシャル・キャピタルについては、あまり論じられてこなかった。そうした研究が深まることで、より本質的なCSR論の展開、実効性のあるCSRの実践にもつながっていくことを期待します。企業にとってソーシャル・キャピタルとは、アセットマネジメントの課題として、今後も企業競争力上、重要な意味を持つのではないのでしょうか。

宮川 私自身、若い頃に「見えざる資産はバランスシートに現れないが、重要なものだ」と書いたことがあります。戦後、日本の工場はどんどん改善され、目に見える資産はよくなりました。ただし、その頃はマネージメントする「管理技術」という言葉を使っていました。生産技術と管理技術の二つが車の両輪のように必要で、生産技術は工場でもよくなっているが、会社を経営していくためのテクノロジが、すなわち管理技術がまだまだではないか。それはバランスシートに載らない資産である」ということで、昭和三〇年代後半に日経新聞とかに書いたことがあります。これは、見えざる資産というものにつながると思っています。今は、見えざる資産はもっと広く解釈されていますけど、単に管理技術だけでなく、組織や会社の中の、人のつながりとか、ブランドと

か、会社内部のソーシャル・キャピタルみたいな使われ方もしていますけれど。

清水 先生はご自身の経験をもとに、「豊かさの多様性」についても問題提起をされておられますね。そういった意味では、経済指標や一義的に数値化された豊かさ指数などがハイスコアとなる「よい社会」の建設とまではいなくても、少なくとも精神的に豊かな社会、個人々が生活のうちにその人なりの豊かさを感じられる社会の構築に向けてソーシャル・キャピタルの議論を深めていく必要があるのではないかと思います。それだけに、先生には今後ますます優れた教師としての立場で、我々に語っていただければと思います。

宮川 これからの社会のあり方を考える上で一番強調したいのは、長期的な観点、パットナムのようにテレビの影響だけではなく、もっと長期的な大きな社会を論ずる流れになるものを視野に入れて考える必要があるのではないかと思います。ソーシャル・キャピタルというテーマは、

宮川 公男 (みやかわ・ただお)

麗澤大学国際経済学部教授
財団法人統計研究会理事長
一橋大学名誉教授

1931年埼玉県生まれ。53年一橋大学経済学部卒業、58年一橋大学大学院博士課程修了。一橋大学商学部教授を経て現職。著書は、『政策科学の基礎』(東洋経済新報社)、『政策科学入門』(東洋経済新報社)、『ソーシャル・キャピタル』(共編著、東洋経済新報社)、『高速道路 何が問題か』(岩波書店)、『意思決定論』(中央経済社)、『The Theory of Public Policy』(Routledge社)など。

清水 英範 (しみず・ひでのり)

大阪ガス エネルギー・文化研究所
主任研究員

1989年東京大学経済学部経済学科卒業。大阪ガス(株)に入社後、経理・財務部門、関係会社出向を経て2002年3月より現職。研究領域はエネルギー、環境問題。



経済学という一つの学問だけでなく、いろんな学問分野の人が、それぞれ自分なりのものの見方を提示できるようなテーマになるような気がします。特に重要なのは職の問題ですね。失業問題。高齢化社会問題。団塊の世代のリタイアを皮切りにして起こってくる高齢化社会のあり方の問題。ソーシャル・キャピタルの豊かな社会にならないと、かつての福祉国家のように、単に高齢者に年金を渡して、働かないで公園でブラブラしていても人間は幸福かどうかという問題につながります。私は、それでは決して幸福ではないと思うので、このことをどう考えるか。そこでソーシャル・キャピタルというのは重要な役割を果たすと思うのです。これからどの国でも抱える高齢化の問題とソーシャル・キャピタルは、当然、絡み合ってくる問題だと思っています。

清水 急速な高齢化の進展など社会の構造変化が進む中、今後ますます重要性が増すテーマだけに、これからも関心を持ち続けていきたいと思っています。今日はお忙しいところ、本当にありがとうございました。

CEL